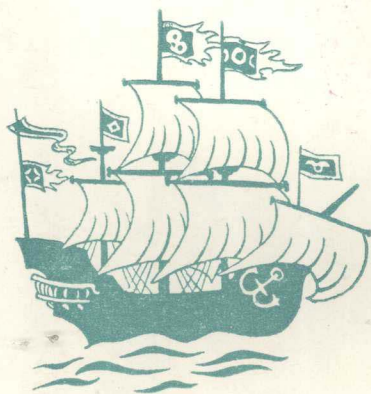


1日1題
30日完成

現代国語

濱松俊男編



[高校2・3年用]

日 栄 社

1日1題 現代国語
30日完成

(別冊解答付)

昭和55年7月20日 初版発行

編者

濱松俊男

発行者 東京都千代田区神田錦町2-3

斎藤雄次

印刷者 東京都江東区亀戸9-4-6

大木西良

101 東京都千代田区神田錦町2-3

発行所 株式会社 日栄社

振替東京 3-16159 電話東京 03 (292) 8601~8603

組版・第二整版(山)

1日1題
30日完成

現代国語

濱松俊男編

日 栄 社

はしがり

一、本書は、一日一題ずつ、三〇日間で、詩歌・小説・隨筆・言語・日記・評論の各分野にわたる問題を学習できるように編集し、《今日のチェック》で、その日の学習目標を提示した。

二、最近の大学入試問題の中から、比較的平易で、読解力の養成に適したものを精選し、学習上不要と思われる設問は一部省略した。

三、設問の後にあげた漢字のうち、◎印は、書けるようにしておかなければならない漢字、○印は、読めるようにしてほしい漢字である。

四、別冊解答書に収めた解説は、設問に対する解説といふより、本文の読解に重点を置いた。

目

次

第1日	「日本人の美意識」	久保田 淳	4	第16日	「科学者と芸術家」	寺田 寅彦	34
第2日	「二つの泉」	島崎 藤村	6	第17日	「巢 箱」	野上弥生子	36
第3日	「小景異情」	室生 犀星	8	第18日	「曰く言い難し」	福永 武彦	38
第4日	「馬鹿の花」	三好 達治	10	第19日	「かけはしの記」	正岡 子規	40
第5日	「訪問者」	伊東 静雄	12	第20日	「断腸亭日乗」	永井 荷風	42
第6日	「写生派歌人の研究」	北住 敏夫	14	第21日	「尾崎放哉」	伊沢 元美	44
第7日	「舞踏会」	芥川龍之介	16	第22日	「幸福について」	中村 光夫	46
第8日	「放浪記」	林 芙美子	18	第23日	「芸術論集」	加藤 周一	48
第9日	「忘れ得ぬ人々」	国木田独步	20	第24日	「北原白秋」	瀬沼 茂樹	50
第10日	「吾輩は猫である」	夏目 漱石	22	第25日	「歴史小説の問題」	大岡 昇平	52
第11日	「れくいえむ」	郷 静子	24	第26日	「西行と定家」	安田 章生	54
第12日	「新日本語論」	金田一春彦	26	第27日	「現代日本の考察」	亀井勝一郎	56
第13日	「現代日本語」	岩淵悦太郎	28	第28日	「人生論ノート」	三木 清	58
第14日	「日本語の感覚」	外山滋比古	30	第29日	「三太郎の日記」	阿部 次郎	60
第15日	「論文の書き方」	清水幾太郎	32	第30日	「モオツァルト」	小林 秀雄	62

第 1 日

(月 曜日)

近代・現代においても日本の詩人は、やはり自然によって詩情を(1)シヨクハツされているというケースが非常に多いと思う。

三好達治の『A』には「雪」という、非常に簡潔な詩がある。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

藁屋根わらやねの古い民家の下で、太郎や次郎が眠っている——この場合、太郎と次郎とは、一つ屋根の下ではなく、まったく同じような造りの民家がぼつんぼつんとあつて、それぞれの屋根の下に太郎や次郎が眠っているという情景を思い描いた方がいいような気がするが——その藁屋根の上に音もなく、まるでふわりと暖かい掛け蒲団かきとんのように真白な雪が降り、積もってゆく、そういった古い日本の「B」な美しい風景が、じつによく表わされている詩であると思う。ここで詩人の詩情を動かしているものは、雪という自然そのものであるというところが、はつきりと読み取れるであらう。なにしろ、主語は雪なのであるから。

それから、丸山薫の『北国』という詩集に、「雪がつもる」という詩がある。

1 雪がつもる

2 山の上の小さな学校で

3 けさも始業の鐘が鳴る

10 しんとする

11 あゝ あゝ しづかだ

12 まつたくしづかだ

問一 傍線部(1)・(2)の片仮名をそれぞれ漢字で記せ。

問二 問題文中『A』にはいるべき詩集を次のア～オの中から選べ。

ア 在りも日の歌 イ 月に吠える

ウ 思ひ出 エ 測量船

オ 抒情小曲集

問三 問題文の「B」に入れるのに適切な語を次のア～オの中から選べ。

ア 民俗的 イ 夜話的 ウ

民族的 エ 寓話的 オ 民話

問四 丸山薫の詩「雪がつもる」の元の形は五連に分かれていて、最終連は行の数が最も多くなっている。第二、四連の終わりはそれぞれ何行目になると思うか、次のア～オの中から選べ。

ア 九行目と十二行目 イ 三行目と十四行目

ウ 八行目と十二行目 エ 三行目と十行目

オ 八行目と十四行目

4 オルガンがひびき

5 子供達の

6 本を読むこゑや

7 手を挙げるこゑが

8 かん高きこえる

9 そして しばらく

阪本越郎氏はこの詩の鑑賞で、雪が積もるといふ東北の山岳地帯では日常のことが「この詩人にとっては、大自然を肯定的に考えさせ、豊かな親和力を呼びさます貴い体験であった」といわれる（『日本の詩歌』24）。自然との親和・融合ということ、これが日本の詩情を支える最も基本的なことではないであらうか。これはあまりにも当然なことであるが、やはり確認しておかなければならないことのように思われる。

（久保田淳「日本人の美意識」による）

13 木々が黙つて

14 それを聴いてゐる

15 何処か谷を⁽⁸⁾へだてた遠くの

16 山々の兎や栗鼠達が

17 耳を立てゝ じつと

18 それを聴いてゐる

問五 問題文の丸山薫の詩は彼が山形

県の西山村にいた時のもので、この詩を読むと、彼がその土地を単に通過しただけでないことがわかる語がある。それはどの語か、五字以内で記せ。

問六 阪本越郎氏は、この「雪がつも

る」の詩の鑑賞文の文中で、「終連に山の兎や栗鼠を配したのも、その（a）話風の発想が（b）を得ている。」と言っている。（a）（b）の中に入れるべき一字をそれぞれ次のア～オの中から選べ。

（a）ア 閑 イ 童

ウ 神 エ 佳 オ 会

（b）ア 時 イ 的

ウ 妙 エ 心 オ 所

◎ 簡潔・挙げ・鑑賞・親和・融合

《今日のチェック》

① すぐれた詩と詩の解説文とをよむことは、詩の鑑賞にとって大切なことである。

② 詩をよむ喜びを知ることによって、詩のすぐれた鑑賞家になっていこう。

③ 詩を味わうことによって、豊かな情感を養っていきたい。

第 2 日

() 月 日 曜日

二つの泉

(一)

自然の母の乳房より
そこに流るる泉あり
たとへば花の処女おとめこの
やがて優しき母となり
その嬰兒みどりごの紅唇くちびるを
うるほすさまに似たるかな

(二)

一つは清すみて冷ひややかに
谷の間にほとばしり
葉を重ねたる青草の
しげみのうちを流れけり

(三)

一つは泉あたたかに
其色そのいろ暗く濁りいで
ひびきは神の鳴ることく
巖いわの蔭かげに溢あふれけり

四

幸さいはあつさにつかはて
渴かわきかなしむ人にあれ
ああ樹きの蔭の草深く
すめる泉を飲みほして

問一 「二つの泉」について次の問いに答えなさい。

(1) うたわれている順序によって、

かりに A・B とすれば、それぞれどう呼んだらよいか。二字の漢字で書きなさい。

(2) A・B の泉は、それぞれ何連にうたわれているか。それに相当する連の番号を書きなさい。

問二 次の各項は、それぞれの連にうたわれたことを説明したものである。それに適當する連の番号を書きなさい。

(イ) 泉の湧き出る自然の状態がうたわれている。

(ロ) 泉の恵みの永遠であることがたえられている。

(ハ) 泉の恵みが比喩を用いて美しく描写されている。

(ニ) 泉は人びとに安らぎを与えるものとしてうたわれている。

問三 第四連・第五連にうたわれている

《今日のチェック》

- ① ゆっくり読んで、題材・各連の關係に注目して、構成を明らかにしていく。
- ② 対句・リフレイン・倒置・漸層法・比喩などのレトリックを見抜く。
- ③ 詩の韻律を味わい、詩型にも注意を払い、内容との関連を考える。

自然のうちに湧きいづる
清き生命を汲ましめよ

④

幸は望みの薄くして
思ひなやめる人にあれ
ああ夕風のきたるとき
熱き泉に浴みして
自然のうちにほとばしる
奇しき力を知らしめよ

⑤

岩と岩との谷のかげ
砂と砂との山のはを
緑の草の生ひいでて
花さく園となすまでは
あふれいでつつ昼も夜も
たえぬ泉としるや旅人

(島崎藤村「夏草」)

る「幸」はどういうことを意味しているか。それぞれの連の中のことばを用いて、四〇字以内で答えなさい。

問四 この詩の形式について次の問いに答えなさい。

- (1) このような詩の調子を何というか。また、これと対照される詩の調子を何というか。
 - (2) この詩は、特に最後だけ七・七で結んでいるが、それはどのような効果を見込んだものか。次にあげるものの中から、適当と思われるものを二つ選んで、記号で答えなさい。
- (a) 流動感を与える (b) 変化を与える (c) ゆるやかに止める (d) 簡潔にする (e) 軽やかにする (f) 感動を高める

第 3 日

(月 日 曜日)

小景異情 その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや

うらぶれて異土の乞食^{かたゐ}となるとも

帰るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

(室生犀星「抒情小曲集」)

〔甲〕——これは年少時代の作者が、都会に零落放浪していた頃^{れい}の作である。

母親と争い、郷党に指弾され、単身東京に①ヒヨウハクして来た若い作者は、空しく衣食の道を求めて、乞食の如く日々街上を放浪していた。そうして都会の空には、いつも晴れた青空があり、太陽は輝き、雀は公園の樹に囀^{さえず}っていた。至る所の街々に、見知らぬ人々の群集する浪にもまれて、ひとり

問一 傍線①④のカタカナの部分
漢字になおしなさい。

問二 上の詩を構成上四段に分けると、二、三、四の各段はどこから始まりますか。それぞれ始めの三文字を抜き出して示しなさい。

問三 空欄A・Bには、それぞれ詩中の語句十字以内を抜き取って埋め、空欄Cには、「東京」「金沢」どちらか一方の語を入れなさい。

問四 〔甲〕の解説には、解釈上一つの無理があります。それはどのようなところですか。二十字以内で書きなさい。

問五 〔乙〕の解説が、上の詩を「故郷金沢での作品」と見る根拠を、詩の中から十字以内で抜き出して示しなさい。

都の夕暮をさまよう時、天涯孤独の悲愁の思ひは、遠い故郷人の②シボを禁じ得ないことであろう。しかもその故郷には、我をにくみ、侮り、鞭打ち、人々が嘲笑っている。よしや零落して、乞食の如く飢死するとも、決して帰る所ではない。故郷はただ夢の中にのみ存在する。ひとり都の夕暮に天涯孤独の身を嘆いて、悲しい故郷の空を眺めている。ただその心もて、遠き都に帰らばや。遠き都に帰らばや。

(註。此処で故郷のことを「都」といつているのは作者の郷里が農村でなく、金沢市であるからである。)

〔乙〕これを東京の作でなく、故郷金沢での作品と見る方が③ダトウだろう。

東京にいれば故郷はなつかしい。しかし故郷に帰ればA□□き感情に苦しむ。東京にいるときB□□その心をせめて抱いて、再び遠きC□□に帰ろう。と見る方が詞句の上で無理が少ない。……とまれ故郷に対する愛情と(a)憎悪の入り乱れる思ひを主題とし、(b)音楽的な④センチツと、曲線のな流動の美しさをそなえて、抒情小曲としては、渾然たる作品に近い。

《今日のチェック》

- ① 詩は平板に読むものではない。詩に内在する音楽的旋律を感じよう。
- ② 解説文がある場合には、それに即して詩を味わいながら、自分のイメージと比較してみよう。
- ③ 感動の中心は何か考えることは、俳句・短歌の場合と同じく大切なことである。

問六 傍線(a)の「憎悪」の「悪」と同じ読み方をする語を、次の中から選んで符号で答えなさい。

- ① 醜悪 ② 好悪 ③ 惡癖
④ 險惡 ⑤ 嫌惡

問七 傍線(b)の「音楽的なセンチツ」は、上の詩のどのようなところから生じていますか。それぞれ十字以内で、二つ挙げなさい。

◎ 放浪・郷党・指弾・孤独・悲愁・

零落

○ 嘲る・鞭

第 4 日

(月 日 曜日)

花の名を馬鹿の花よと
童べの問えばこたえし

紫の花

八月の火の砂に咲く

馬鹿の花

馬鹿の花

三里浜三里の砂の丘つづき

この花咲きて

海どりの白きむらがり

古志の海日すがらここにとどろけり

赤きふどしの蟹の子ら

松の林にあらわれて

わめきざわめき走りゆく

踵やくまばゆき砂に

人の子の影のすばやさ

そよやはやかえらぬ時を

三たびまたこの花さきし

日のさかり

問一 「童べの問えばこたえし」の
「こたえし」の主語は何か。

問二 「人の子の」の「人の子」とは
誰のことを言っているのか。

問三 「遠きしじまの」の「しじま」
に、漢字をあてるとしたら、どうい
う字を書いたらよいか。

問四 「ひななれど」という語は、意
味から見て、「もろげなる」にかか
るのか、それとも「ゆかし」にかか
る語か。

問五 この詩の中に、色彩をあらわす
語は幾種類あるか。

問六 「あはれ知る人なき浜の」とい
う句は、次のうちのどれの意に解し
たらよいか。番号で示せ。

1 ああ、だれも知った人になわ
ないさびしい浜の……。

2 この情景の美しさのわかるよう

帽のつば広きかたむけ

ひとりわが越えゆく丘の起き伏しに

蔓は蜘蛛手にはびこりて

遠きしじまの紫の

花はかろらに息づけり

そよとだに風も吹かぬに

その花のみなわななける

手にとらばやがてしおれむ

ひななれどもろげなる

心もゆかし

馬鹿の花

馬鹿の花

あはれ知る人なき浜の

八月の

火の砂に咲く

紫の花

(三好達治「砂の砦」)

《今日のチェック》

① 季節・場所・時間・色彩・明暗などに着眼し、イメージを描く。

② 文字について気をつけよう。漢字・平仮名・片仮名・ローマ字それぞれ違った情緒を生む。

③ 頭韻・脚韻の有無も詩のリズム・内容と関連したレトリックの一つである。

な人もいない浜の……。

3 ああ、だれも人の知らない片い
なかの浜の……。

問七 作者はなぜ、この「馬鹿の花」

に興味を持って作詩までしたのであ
ろうか。次のうち適当と思うものを
番号で示せ。

1 「馬鹿の花」というへんな名ま
えがめずらしいからであらう。

2 デリケートな感じの花であるの
に、「馬鹿」などという無神経な
名がついている点に興味をひかれ
た。

3 「馬鹿の花」——それはなんと
おれの詩に似ているではないか
——という自嘲めいた気分から……。

○ 踵・蔓・蜘蛛

第 5 日

訪 問 者

トマトを盛った盆のかげに
忘れられている扇

その少女は十九だと答えたつけ

はじめてひとに見せるのだという作詩を差し出すとき

① さつきからの緊張にすっかりうけ応えはうわの空だった

② もっと私が若かったら

きつとそれを少女の気ままな不機嫌ととったろう

③ あるいはもすこし年をとっていたなら

かの女の目のなかで懼れと好奇心が争って

強いて④ レイタンに微笑しようと骨折るのを

老練した老詩人にむける⑤ アワれみの目色と⑥ ジャスミしたろう

いま私は畳にうずくまり

客がおいていったノート・ブックをあける

鉛筆書きの沢山の詩

(月 日 曜日)

問一 傍線①「さつきからの緊張にすっかりうけ応えはうわの空だった」とあるが、こうした「少女」の心象を象徴的に描いていると思われる部分を二つ選び、それぞれ本文の一行を抜き出して答えよ。

問二 傍線②「もっと私が若かったら」と、傍線③「あるいはもすこし年をとっていたなら」で、過去と将来の自分を仮定しているが、作者は眼前の「少女」のようすをその時どう感じていたのか。本文中より該当する部分を抜き出し、はじめとおわりを五字ずつ記せ。

問三 傍線④「はげしい喪失の身悶え」とあるが、この表現から想像される愛の状態を、わかりやすい語句で答えよ。字数は十字以内とする。

問四 傍線⑤の「神」が示唆するものは、この場合次のどれをとるのが適当か、記号で答えよ。

ア 歓喜 イ 莊嚴 ウ 祈願

愛の空想の詩をそこによむ

やっとめざめたばかりの愛が

まだしかとした目あてを見つける以前に

はや④はげしい喪失の身悶えから⑤神を呼んでいる

そして⑥自分で課した絶望で懸命に拒絶し防禦ディフェンスしている

ああ純潔な何か

出されたまま触れられなかったお茶に

もう小さい蛾がが浮んでいる

⑦⑧シヨウガイを詩に捧げたいと

少女は言ったつけ

この世での仕事の意味もまだ知らずに

(伊東静雄「反響」)

《今日のチェック》

① 詩のもつ特有の雰囲気を通して、作者を知ろうとつとめることも、詩読解に欠かせないことである。

② 詩はいわゆる文脈がない。言葉と言葉の間を埋める想像を働かせていく。

③ 自由詩であっても韻律を味わい、詩の美しさを味わう。

エ 救済 オ 原罪

問五 傍線⑥「自分で課した絶望で懸命に拒絶し防禦している」の部分

で、「少女」は、I 何を「拒絶」

し、II 何を「防禦」しようとしているのか。左の中よりそれぞれ適当

するものを選び、記号で答えよ。

I ア 愛が空想に終わること

イ 現実の失恋に傷つくこと

ウ しかとした目あてをみつ

けること

II ア 絶望 イ 喪失

ウ 神 エ 愛

問六 傍線⑦「シヨウガイを詩に捧げたい」という「少女」のことばを、

作者はどう受けとったか、四十字以

内で答えよ。

問七 波線①～③のカタカナを漢字に

改めよ。

第 6 日

(月 日 曜日)

生まれること、生きることをしばしば歌った茂吉は、死を歌っていることも多い。しかも死が、生との関わりにおいて扱われているのが目を惹くのである。

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世に戦きにけり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死にゆくを見たり死にゆくを死は生者に対して現身の意識を刺激する所以であり、生の無力を感じさせると共に、愛着の心をも深からしめる。茂吉ももとより、肉親の死に臨んでは、

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たりけるかな

というような哀切な悲しみを抑えることはできない。けれども同じ事情の下において、

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

と歌う時、しんしんと聞えてくる蛙の声に、生を終えようとする間際の命が、ひびきを合せているのを感じ取っているのではなからうか。死の悲痛を超えた厳肅な生命感が漲っている。

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

この歌になると、死の悲しみがやがて「ア」ことは明かである。そうして矚目の自然物——生なきものに対しても、激しい生命感が投射せられることとなる。

問一 空欄「ア」にあてゐるのにもっとも適当と思うものを、次の項目(1

〜4) から一つ選び、記号をもつて示しなさい。

1 静かなよろこびをいだかせる
2 生の力の讚美に通じている

3 生きる寂しさにつながっている
4 苦悩からの脱出を思わせる

問二 歌の空欄「イ」に入れるのにもっとも適当と思うものを、次の歌

(1〜4) から一つ選び、記号をもつて示しなさい。

1 あかときの草の露玉七いろにか
がやきわたり蜻蛉うまれぬ

2 あが母の吾を生ましけむらわ
かきかなしき力おもはざらめや

3 かへるごは水のもなかに生まれ
いでかなしきかなや浅岸に寄る

4 太陽のひかり散りたりわが命た
じろがめやも野中に立ちて

問三 傍線をほどこした部分A「後者の優越を示している」は、どうい

遠天を流らふ雲にたまきはる命は無しと云へばかなしき

亡き母の命を追う心が、天涯を望んでこのような悲壮な詠嘆をなさしめたのである。

生命力の充溢は、確かに茂吉の抒情世界を特長づけるものといえるであろう。それは万葉人の生の逞しさにも通じ、原始的であるともみられる。しかも茂吉は、特異な感覚を持ち、また自我の悲哀や虚弱を意識する近代人であった。そうしてそういう生の否定面は、力強い肯定面と表裏しつつも、結局においてはA後者の優越を示している。

生と死に対する関心はやはり強いが、次のような作には以前とはかなり趣を異にするものが認められる。

「イ」

草づたふ朝の螢よみじかるわれのいのちをB死なしむなゆめ

生き物や自己自身をいとおしみながらも、生の歓喜や意欲を歌い上げるのではなく、深い哀韻をこめているのが注目をひく。

《今日のチェック》

- ① 季節・場所・詠まれた事情・色彩・用字・用語に着眼し、短歌によまれた叙景・叙情をつかむ。
- ② 近代短歌といえども、まったく技法がないわけではない。特に序詞・かけことば・枕詞に気をつけたい。
- ③ 感動の中心を感じとることが最も大切である。そのために、歌風を知ることにも必要になってくる。

意味のことをいっているのか、簡潔に説明しなさい。

問四

傍線をほどこした部分B「死なしむなゆめ」は、どういう意味をあらわそうとしているのか。次の項目

(1) (4) から、もっとも正しいと思うものを一つ選び、記号をもって示しなさい。

(1) 死なせてほしい、いっそのこと。

(2) 死なせないでよかった、ほんとに。

(3) 死なせるのか、夢のようにではなく。

(4) 死なせてはいけない、けっして。